松隈洋×田中里奈×大森晃彦　トークイベント　*in* ＴＡＵ

3月24日にひろしまブランドショップＴＡＵにて行った「松隈洋×田中里奈×大森晃彦　トークイベント　in TAU」について，当日ご参加いただけなかった方のためにも，写真満載でお届けます！

今回は，女性ファッション誌で活躍中の人気読者モデル田中里奈さん（広島市出身）と京都工芸繊維大学教授の松隈洋さん，株式会社建築メディア研究所の大森晃彦さんをゲストとしてお招きし，「女性を惹きつける建築」をテーマに，建築分野でご活躍されている松隈さん，大森さんからの視点と，ファッション，旅等の建築分野外でご活躍されている田中さんからの視点を交えて，楽しく語っていただきました！

今回のトークイベントに合わせて、会場の階段スペースで『たてものがたりパネル展』も合わせて開催しました。

ここで，少し広島県の事業をご紹介します。

「たてものがたり」は，広島県内の「魅力」ある建物を，地域の宝として内外に発信していく，県民参加型のプロジェクトで5年が経過しています。

最初の１年目である昨年度は，一般公募や選定委員会による審査，一般投票を行い，訪れたい建物「100セレクション」や「ベストセレクション30」を選定し，発表いたしました。

そして，2年目以降は，「選んだ建物」を「アピール」し，「訪れてもらうためのきっかけづくり」を進める年と位置付け，建物所有者・関係者の皆様と連携し，魅力ある建物を舞台に，見学会等のイベントを開催する**「たてものがたりフェスタ」**を開催いたしました。

「ひろしまたてものがたり」に関する内容は県ホームページでも公開しております。ぜひ，ご覧ください。

http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/tatemonogatari/

さて，その他にも，**「広島型建築プロポーザル方式」**による魅力ある公共建築物の創造にも取り組んでいます。昨年度は，世界遺産宮島の玄関となる厳島港宮島口地区旅客ターミナルや，世界中で活躍するリーダーを育成する広島叡智学園のプロポーザルを実施しました。広島叡智学園はH31.4一部開校し，宮島口地区旅客ターミナルはH32に竣工予定です。

広島叡智学園（H31.4一部開校予定）

「ひろしま建築学生チャレンジコンペ」という，全国的にも珍しい試みも開始しております。このコンペは，最優秀作品を，“実際に建ててしまう”もので，学生や指導教員の方と一緒になって，建築をつくりあげ，魅力ある優れた人材を育成しよう　という試みです。

2013年は「道の駅（ふぉレスト君田）駐車場トイレ」、2014年は「福山東警察署野上交番」，2015年は「御幸松広場トイレ」，2016年は「広島県立広島工業高等学校野球部・弓道部部室」が対象建物でして，共に竣工を迎えております。

さて，皆様お待ちかね，田中里奈さん，松隈洋さん，大森晃彦さんの登場です！

大森さん　「それでは、立ったままで自己紹介をお願いします。」

田中さん　「モデルの田中里奈と申します。今日はよろしくお願いします！」

松隈さん　「松隈です。京都から来ました。よろしくお願いします。」

大森さん　「松隈先生は、本当の先生なので固い話をしそうなので、今日は田中さんが打ち解ける感じでお願いします。（笑）」

松隈さん　「大学の講義みたいなのをしないでね！って、先ほど言われました。（笑）」

田中さん　「そうなんです。言っちゃいました！（笑）」

大森さん　「大森です。建築のメディアの方をずっとやっておりました。どうぞよろしくお願いいたします。」

～私の好きな街並み，建物はこれ！（田中さん）～

大森さん　「今回のテーマは「女性を惹きつける建築」ということで、まず女性が何に惹きつけられるかが一番大事で、私の好きな建築、街並みはこれ、というところで田中さんからファーストプレゼンテーションを。」

田中さん　「はい。このトークにあたって「好きな建築の写真を何個かください」と言われたときに、「建築ってなに？」ってところから入ったので…。建築ってどれぐらい知っているんですかね。ここに今日来られている方って？」

大森さん　「アンケートで建築が好きって人と、田中さんに会いたいという人と２通りありまして、田中さんに会いたい人がちょっと勝っていました。」

田中さん　「なるほど、ありがとうございました。私はひよこちゃんなので、お二人に学ばせていただきながら、私が思っていることをお話ししようかなと思います。」

田中さん　「１つ目は、広島県福山市にある神勝寺を訪れたときのものですが、ＵＦＯみたいなめちゃめちゃ大きい建物なのですけど、これ自体が名和さんのインスタレーションになっていて。これがお寺というわけではありませんが、インパクトがあったので出しました。」

大森さん　「僕も行きました！のちほどまた。」

松隈さん　「こういうのはどうやって辿りつくのでしょう？」

田中さん　「・・・そこにあったので。（笑）建築のイメージって、パッと見てのアウトライン的なインパクトなのかな、といったところからまずこれを出しました。」

大森さん　「壁とか屋根の葺き方が伝統的なものを使いながら、今風にしているところがかなり新しいし、建築としてもかなり上手につくっているので、時間が経ってもボロボロにならないようにつくっていますから、僕も感心しました。」

田中さん　「これ自体は新しいものですよね？」

大森さん　「たしか２０１５、６年ですね。」

田中さん　「この中に入ると真っ暗闇になっていて、水が張ってあり、たとえばこの長方形がこの部屋だとすると、ここに席があって…。禅寺なので、そこに座ったらたぶん水みたいなところからずっと波と光が押し寄せるのを３０分見るインスタレーションで。」

大森さん　「このお寺は造船会社をやっておられる会社の菩提寺でして、だから水があるのがわ

かるし、まずこの建物のイメージが船じゃないですか。」

田中さん　「ＵＦＯか、ベビーカステラかと思いました。（笑）」

大森さん　「次にいきましょうか。」

田中さん　「これは海外で、ど忘れしちゃいましたが、ロサンゼルスの現代美術館です。すごく有名でして。」

客席　　（写真は、カウンティ美術館だと思います。）

大森さん　**「ありがとうございます！」**

大森さん　**「これもインスタレーションですね。」**

田中さん　**「これは建築ですか？アートですか？」**

大森さん　**「「アートワーク」と呼んだほうがいいかな？」**

田中さん　**「なるほど！」**

田中さん　**「旅で世界中を飛び回っていて、２月とかもほとんど日本にいなくて、エストニア、ベネチア、ロンドン、一瞬帰って韓国に行って、そのあとアリゾナのセドナに行って、そのあとロサンゼルスに行って。また帰ってからも新潟、熊本、広島、北海道、そしていまここにいて飛び回っています。そうやって旅する中でいろんな建物に出会うので、要所で写真を撮りたくなっちゃ病なので…。」**

田中さん　「これ！私はここのホテルが大好きで「ザ・ビューホテル」っていうユタ州なのかな、アリゾナ州なのかな、そんなところかな。ここに関してはとにかく眺めがいいんです。ホテルの名前どおりＶＩＥＷを楽しむ、この辺には一つしかないホテルで、眺めが宇宙かな？と思うぐらいです。ここの良いところはホテルの部屋のランクは無く、みんな一律同じ部屋。建築というより個人的な見解としては、ここの眺めを損ねず調和している感じのデザインが、この場所にピッタリなんですよ。部屋からの眺めが本当に素晴らしく、光が全然ないので夜の星も素晴らしく、これはぜひ入れたいと思いました。建物自体というよりは、そこの眺めの中に存在するものとして、全てで見てほしい１枚です。」

大森さん　「松隈さんの感想を。」

松隈さん　「建築の話になりますが、この建築がなければ、おそらくこの風景は鑑賞はできないわけだから、この建築ができたことの最大の良い理由を今日見せてくださっていると思います。その建築があるから、風景がそういう風に見えてくる、建築の素敵なところかなと思います。またこれは土色（つちいろ）に近い形で建物自体はそんなに主張していませんが、この場所に行かないと味わえない風景を私たちに提供してくれているのだな、と感じます。」

田中さん　「それも含めて建築ですか？」

松隈さん　「そうそう。」

田中さん　「なるほどー！」

大森さん　「この写真を見ると窓の写真が一番大きいじゃないですか。建築って外から普通見ますけど、建築の中から見る風景も、その建築の一部であると言えるかもしれない。その場所を魅せるためにその窓が開いている。」

田中さん　「結構ありますよね。それこそ広島の鞆の浦のお寺かな？あのあたりは窓からの景色がこんな感じで、それだけで絵画みたいなところがすごく多くて、それを意識してつくっているところも多いのではないかと。本当に綺麗ですよね。」

松隈さん　「建築が切り取ってくれている感じでしょ？」

大森さん　「僕なんか建築の雑誌をやっていると、カメラマンが建物の写真しか撮ってこないと、「ちがう。ここから見た風景も建築なんだ。」といつも言っています。」

田中さん　　「次、ここがどこかわかる人？」

客席　　（台湾？）

田中さん　　「台湾ではなくて、香港です。香港は集合住宅が多くて、その有名どころで撮ったものです。トランスフォーマー等の舞台になった有名なところでして、満島ひかりさんのミュージックビデオの舞台にもなっています。だけど、最近撮影禁止になっていて、普通にここに人が住んでいるので、いよいよ最近だめになったようです。たぶん申請したら、いいよって感じになると思いますが。虹色の集合住宅です。」

大森さん　「松隈さんは、昔の香港の啓徳空港に降りたことはありますか？」

松隈さん　「ないない。」

大森さん　「香港には九龍城というのがありますが、テラスが全部増築してあったり…。」

松隈さん　「これだけど、生活のにじみ出ているすごさというか、これだけの人がここに暮らしている迫力があって、ちょっと日本にはない風景ですね。」

田中さん　「ないですね。この写真は一部でして、四方全部これで囲まれていて何棟かあるんです。どんだけの人がいるんだ？って。」

大森さん　「とにかく香港の大きさって沖縄本島ぐらい。そこに７００万人が住んでいて、とにかく土地がなくて上に積み重なるしかない。」

田中さん　「あと、地震もそんなにないですよね。朝行くとおじいちゃんおばあちゃんが太極拳をしていますから。それもまたカラフルで…。」

田中さん　　**「これは広島です。えっとえっと。」**

客席　　（生口島！）

田中さん　　**「そうだ、生口島「未来心の丘」だ。すぐ忘れちゃう。（笑）これはすごいお金持ちの方が、お母さんが亡くなったときに供養のために建てたお寺ですよね。」**

大森さん　「そうですね。「耕三寺」と言います。」

田中さん　「いろいろありますよね。日光東照宮に似せたものとか。日本中のそういうものをギュッとお金にものを言わせて（笑）お寺っぽく。お母さんのために仕立て上げて。これ全部大理石ですよね。」

大森さん　「そうですね。彫刻家も広島出身で、またその師匠も彫刻家で。圓鍔さんと言いますが、そのお弟子さんがつくったものです。」

田中さん　「これ上だけの写真ですが、めちゃめちゃ広くて。右の写真の上に映っているのが左の写真です。」

松隈さん　「手を合わせているのかなあ。」

田中さん　「さあ？？なんですが。（笑）ホントに真っ白で。天気のときに行くと目がこうなるぐらい…。」

松隈さん　「誰でも入れる？」

田中さん　「一応、入場料は入口でありますが、春の前に行くと河津桜が咲いています。」

大森さん　「瀬戸内って空が明るい！空が水面に反射するのがかなりあって、その空の明るさに対抗する白さがこの狙いじゃないかと写真を見ながら思いました。」

田中さん　「なるほど～。やっぱり映えますよね。世界中に行っていると空の色って全然違うんですよ。それにあわせて建物の色も存在しているなって思うことがあります。以上です！」

～おじさんたちがオススメする広島の建物をご紹介（大森さん，松隈さん）～

大森さん　「次は、「おじさんたちがオススメする広島の建物」。。」
田中さん　「台本に書いてあるからって、おじさんたちって言わなくていいんです！（笑）」
客席　（笑）

松隈さん　「おもしろいのは、プロの編集者が撮った写真と彼女たちが撮った写真はちょっと違うので、それを見ていただくとおもしろい。」
大森さん　「「Hiroshima contemporary Architecture」とそれらしく。授業がはじまると。（笑）まず広島県ってこんな形だってことを。そしてここが広島湾…。」

田中さん　「私、実家がこの辺です！」
大森さん　「先に湾があって、海の向こうに象徴的に見えるのが宮島、厳島ですが。」
田中さん　「鳥居が海の中にあるところですね。」
大森さん　「それが街中から常にチラッと見える。」
田中さん　「えっ。見たことないです…」
大森さん　「昔の人はみんな見えたって言っています。今は見えないです。」
田中さん　「広島って埋め立てなんです。」
大森さん　「だから海辺ってあんまりないんですね。川はたくさんある。平らなんだけど上り下りがあるなあと思ったら橋がたくさんあって。広島の町はいろんな水辺があるのが、すごくおもしろいんじゃないかなって思っています。田中さん，実家はどこでしたか。」
田中さん　「この辺です…。」
大森さん　「ここが平和公園と資料館です。」
田中さん　「（客席へ）広島に来られたことある人ってどれくらいいますか？」

客席　　（大半の方が挙手）

田中さん　「結構いますね。」

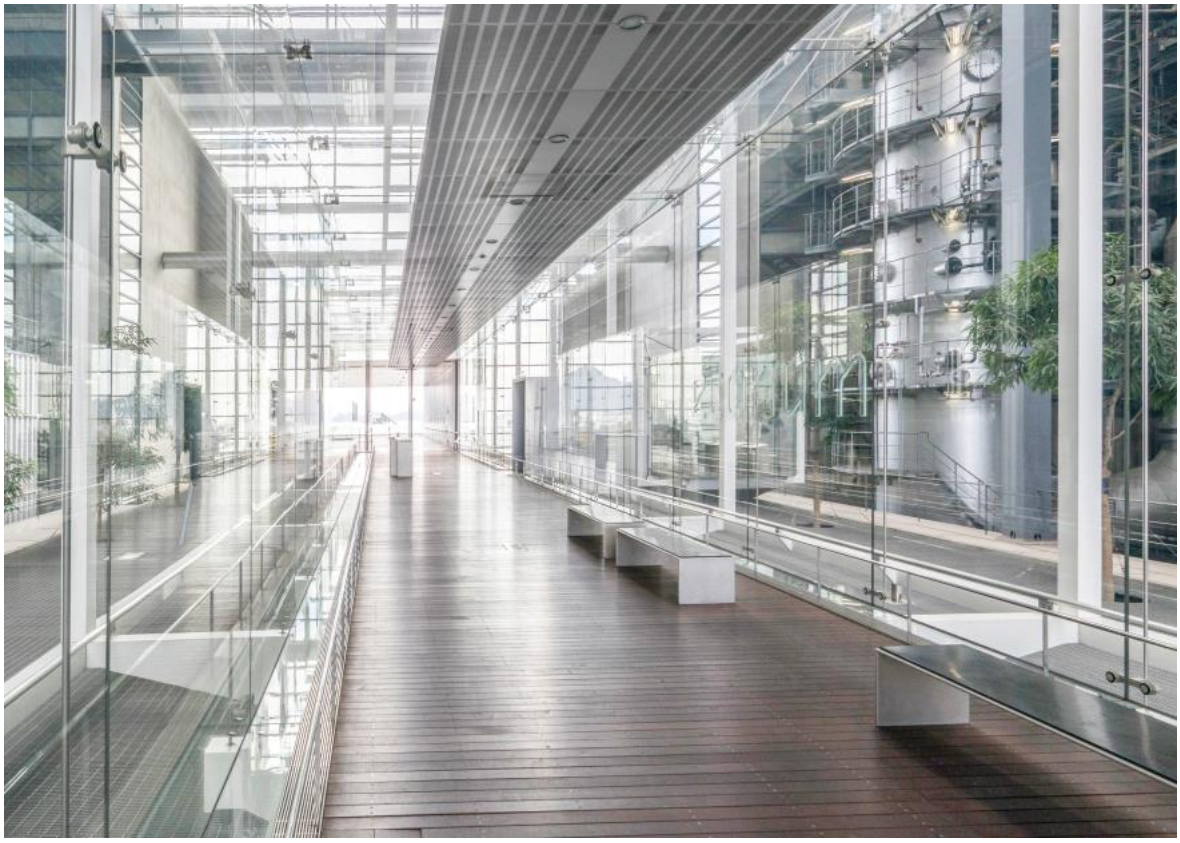
大森さん　「あんまり説明する必要なかったかな。ここに中心の軸がありまして、「吉島通り」と言ってずっとまっすぐなのですが、突き当りに清掃工場があるんです。」

田中さん　「知っています！」

大森さん　「清掃工場と言えば、臭くてあんまり町中にはいらない場所だなって思われますがそれが全然違うということです。「広島市中工場」。中区にあるから中工場。２００４年にできました。さっきの吉島通りをまっすぐ行った場所にありますが、その向こうに壁があって壁の真ん中にスパッと抜けて向こうが見えるんです。この日は曇っていましたが晴れているとかなり空が入ってきます。もしこれが壁だったら誰も行きたくない通りなんですが。」

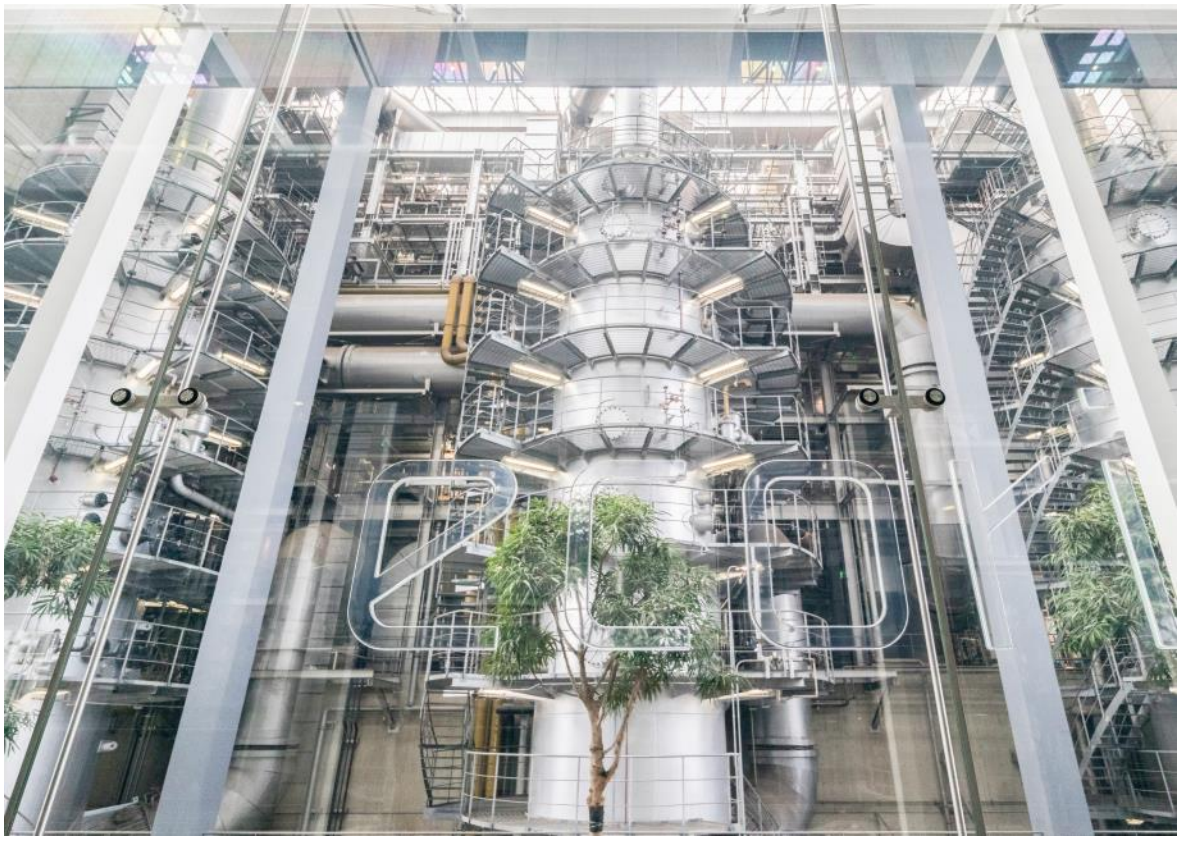
田中さん　「たしかに、閉鎖的ですものね。これ抜けているのですか？」

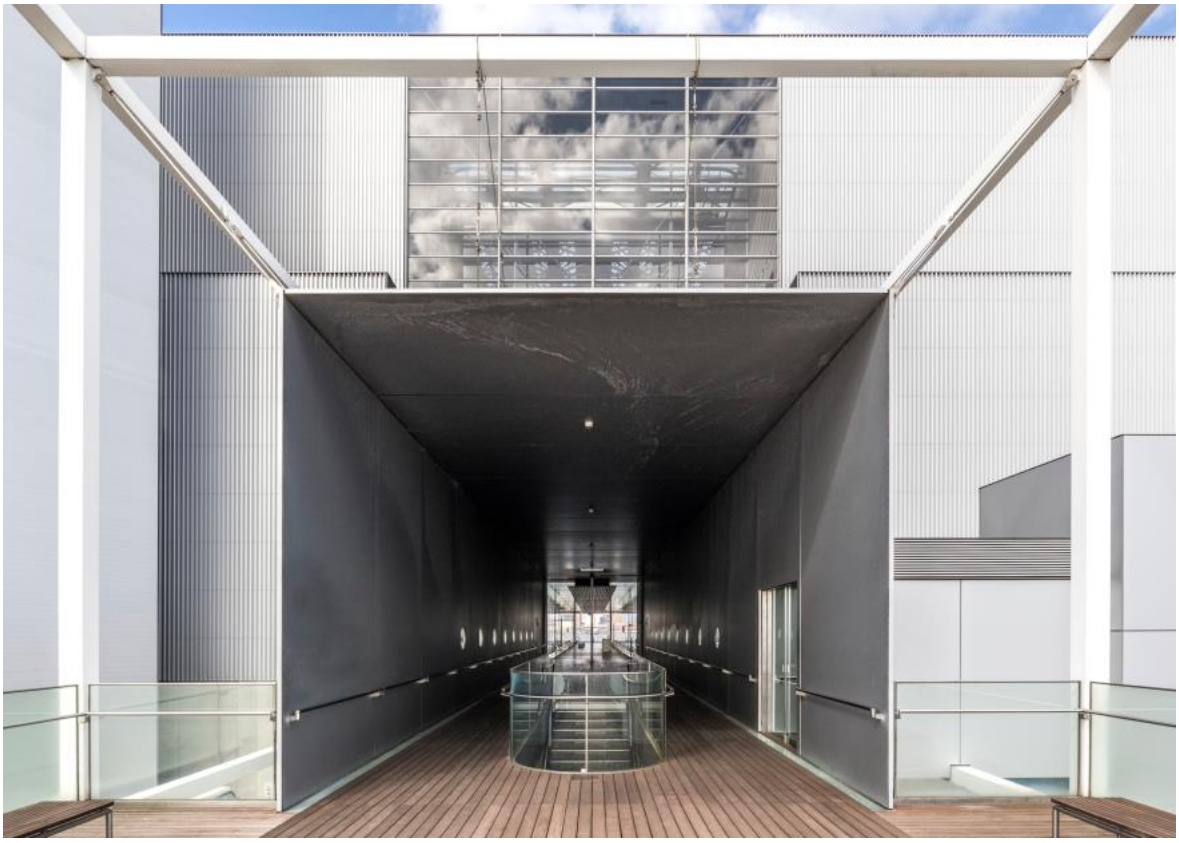
大森さん　「ガラスで抜けているんです。だんだん近づいていくと、清掃トラックは１階に入っていきます。ここから横に階段があって、デッキに人が行くと…」



大森さん　「真ん中にドーンと抜けて海がある。ちょうどこの日は曇っていましたが、島が見えたりします。広島の町が海につながるトンネルなんです。両脇は清掃工場の機械があります。」

大森さん　「オブジェみたいなとても不思議な空間です。抜けていくと枠だけが海に抜けていきます。」





大森さん　「次、これが見せたかった。宮島です。もっと昔の人はわりと知っていたと思いますが。広島の町にいて見える山。東京から富士山が見えるのとちょっと近いようなものが、この宮島にはあると推理したのですが、違いますか。」

田中さん　「あんまり（宮島は）見たことはなかったですが。」

大森さん　「でもこのフレームの向こうに風景があるのは、アートなのか建築なのか。」

大森さん　「次、もうひとつ「おりづるタワー」。これはもともとのオリジナルビルと書いていますが、１９７８年に建った事務所が入ったいわゆる普通のビル、まあいいビルですが、それを２０１６年にイノベーションして「おりづるタワー」になったのです。

大森さん　「のっけに屋上から見てみましょう。これ、里奈ちゃんわかりますよね。原爆ドームがあって、三角形のところが平和公園で、その先に平和資料館本館があると、そしてこれは一つの軸がすっと通っていて、原爆ドームに向かっているというのがかなり重要な話なんです。」

大森さん　「ちょうど原爆ドーム側から見て背景に立っているのが「おりづるタワー」。こうやって見るとわりと普通のビルに見えますが、それはもともとのビルを改装したってことです。」

田中さん　「こんなのありましたっけ？」

大森さん　「できたんです。帰っています？」

田中さん　「帰っているのですが、こちらの方は通らないので。でもすぐ家なんですけど。」

大森さん　「だからたとえば後ろに高層のホテルがありますが、白いのがそのまま白くなるとどうなります？エッジが消えて、世界遺産の建物が見えなくなってしまう。だからそこを濃い色にする。」

田中さん　「ちゃんと輪郭がわかるように、ですね。」

大森さん　「そして当初からそうですが、こちら側に看板や文字が出ていない。そういう配慮があります。ちなみに元のビルはこんなビルでした。わりに綺麗なビルだと思うのですが。」

大森さん　「これが横から見た「おりづるタワー」です。横にポツポツあった窓をあったのを全部ガラス張りにしています。そして面白いのが、ここにガラスの箱があるのですが、これなんか詰まっているでしょ？白いごちゃごちゃっと。折り鶴です。」

田中さん　「へえ…。」

大森さん　「８階ですかね。上の階で鶴を折る。田中さんにお聞きしたいのですが、広島の子は鶴を折るは特別な意味がある。」

田中さん　「授業で折るときはある…。」

大森さん　「8月6日が近くなるとみんな鶴を折るんですよね。」

田中さん　「そうですね。」

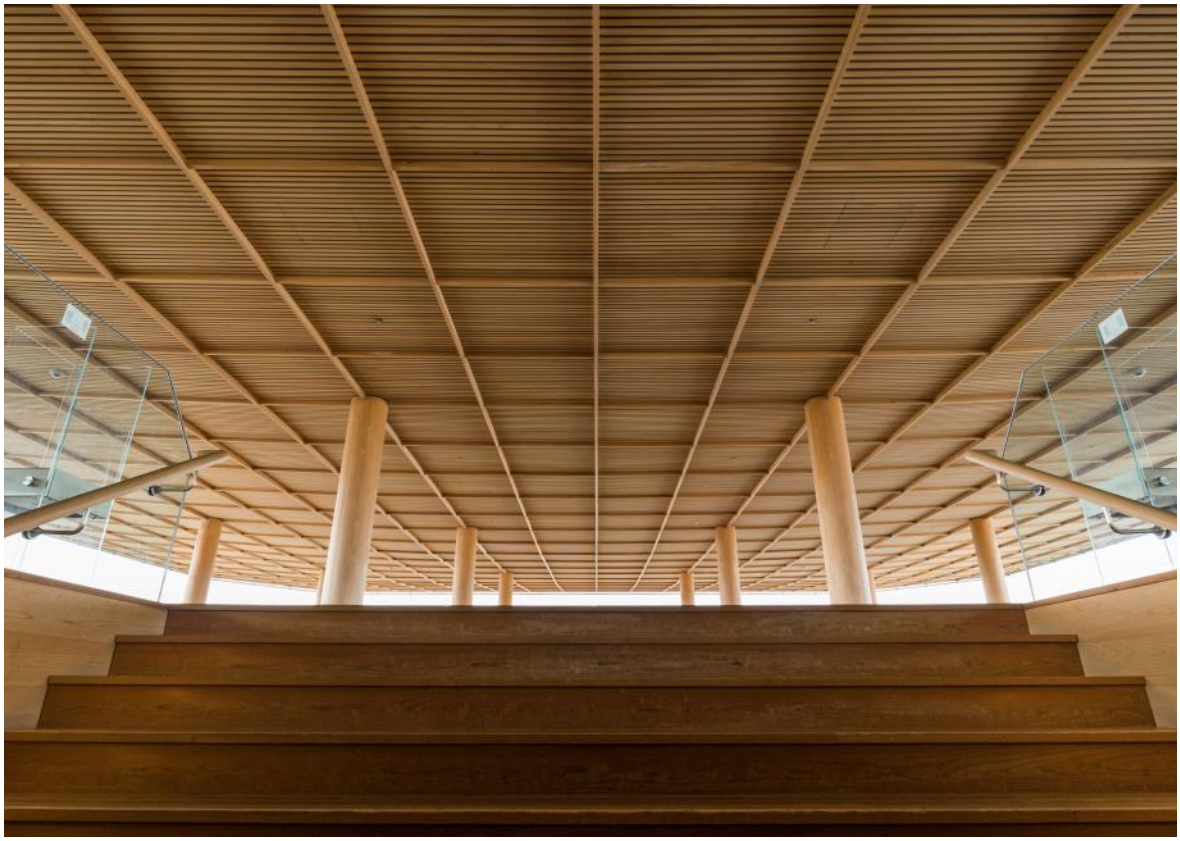
大森さん　「ここは吹き抜けた細いスペースで、折った鶴をフワッと落とすと下から上昇気流がすっと上がりながら、鶴がゆっくりゆっくり舞い降りていき、下に折り鶴が溜まっていくと、そういうストーリーです。」

田中さん　「へえ…。すごいですね！」

大森さん　「パッと見ただけじゃわからないですよね。」

松隈さん　「２年であそこまで溜まるんですか。」

大森さん　「あそこまで溜まっています。何年で貯まるとか言っていましたが、ちょっと早いかもしれないですね。屋上に行くと湾曲した天井。見上げてグワっと湾曲しています。」



大森さん　「県の人と記念撮影。床も下から真ん中に膨らんでいます。それは風が吹いてくると間口が広くて中でギュっと詰まっているから、そよ風が吹いても真ん中にいると心地よい。ちなみに今の時期はまだ涼しすぐるくらいでした。」

大森さん　「それでこの人が三分一博志さん。世界的に有名な若手のホープです。建築学会賞というのがありますが、この人は２回ほど受賞しています。屋根の形、床の形、吹いている風、それを建築にするという。広島にどういう風が吹くというのを調査されているわけです。」

田中さん　「建築家の方は、こんなデザインをやりたいけど、そこから先に物理的に可能か不可能か、そこの計算もされるわけですか。」

大森さん　「されるんですよ。」

田中さん　「それをひっくるめて建築ですね。」

大森さん　「もちろんエンジニアが現実の計算をしますが、様々なアイディアをもとにつくるのがarchitect＝建築家なのです。」

田中さん　「すごいですね。」

大森さん　「デザインって何か表面だけって思っていらっしゃるかもしれませんが、建築って人の流れもそうだし、空気の流れもそうだし、光も、それも全部デザイン。そこに行って気持ちいいなと思うことが、何で気持ちいいか。だから田中さんが行って「気持ちいいな」と思うだけでいいんですよ。建築家はどうしたら気持ちよくなるか、工夫して、考えているわけですから。」

田中さん　「へえ…。」

松隈さん　「三分一さんは空気の流れとかを非常に重要にしていますね。」

田中さん　「デザインだけじゃなくて、居心地の良さだったりそういった表現も含めて、この人はこうだよね、ってなるわけですね。なるほど。」

大森さん　「次、「広島県庁舎」。近代建築萌えの人にはすごく受けるのですが。１９５６年、つまり６２年前で、５６年ということは資料館本館がオープンしたのが５５年です。それと同時期にできています。今は駐車場のところも昔は緑の芝生だったので、それを思いながら見てください。３つの建物が渡り廊下で繋がっています。真ん中の渡り廊下が入口になっています。次、議会棟のファサード。次、南棟の東側外観。」

大森さん　　「次、入口に入ると、ここに何かあります。アートワークです。何かわかりますか。」

田中さん　　「広島県と瀬戸内海ですね。」

大森さん　　「そう、広島県と瀬戸内海。どうしてできたか、誰がつくったかは不詳であり、且つこれをつくっている材料は、鉄筋でつくってあります。そういう不思議なオブジェがあります。次、ホントに普通の感じがしますが、天井とガラス窓の関係とか、外にい

る人が中に繋がっていくような感じがでるように。でもこれに来た人はあまり関係ない。けれど気持ちがすっとして中がみえちゃう。外から中が繋がっていけるように、そういう空間なので、感心しているんです。この赤い柱はオリジナルの赤です。」

大森さん　「ここにスチールで庇が付いていますが、間がすっと透けています。庇と本体の間に隙間がある。上にコンクリートの床が出ているからここから雨が入ることは無いですが、これがあることで壁がすっと伸びていく。暗くならない。普通に見ていると軽々と明るい、窓の下なんか暗くなくて明るい建築だけど、実はいろんな工夫があると。

大森さん　　「次、「新勝寺」。入口を入ると、不思議な感じ。」」

田中さん　　「売店とかありますね。」

大森さん　　「建築の詳しい人はすぐにわかるんですが、藤森照信さんという歴史家である建築家。
手で曲げたような銅版、左官の壁、曲がった自然木…。
次、これは中のエントランスです。ちなみに入場料は、1,200 円です。

大森さん　　「次、手で曲げた銅版。そしててっぺんには松の木が生えています。」

田中さん　　「見ていなかったです。（笑）」

大森さん　「次、「ベラビスタ」。高級ホテル並みですよ。ここには「エレテギア」というレストランと「リボンチャペル」というチャペルがあります。」

大森さん　「これは「エレテギア」というレストランの写真ですが、柱がめちゃくちゃ細い！なぜ細いか。

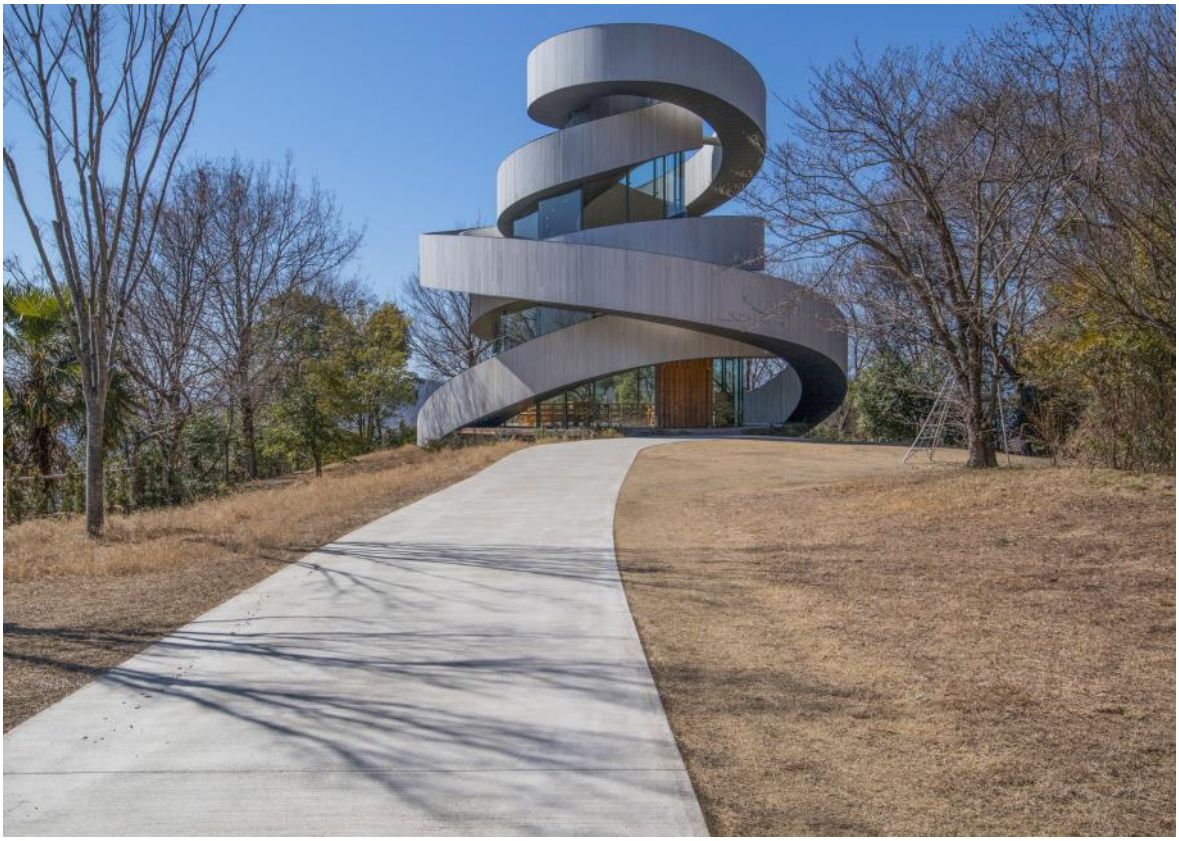
田中さん　「向こう側がよく見えるように？」

大森さん　「そうそう。今見ている方向が海の側で、レストランから瀬戸内海が見渡せる。その時に妨げにならないように柱が４．５mm角の鉄骨です。
次、こんな景色。鉄骨で上の方は木でできている。全ての材料が、４．５mm角である。」

大森さん　「次、「エレテギア」の向こうに変なのがありますね。リボンを絡めたような。「リボンチャペル」という結婚式場です。木の扉を入ると席があって、十字架があって、その向こうは瀬戸内海。これは二重らせんになっています。」

田中さん　「二重構造ってことですか。遺伝子みたいな。」

大森さん　「そうそう。２つが絡みながら一番上で繋がっているわけです。こっちから登るのとこっちから登るのと上で繋がっていて、そこに台があって海が見えるようになっています。つまり新郎新婦が別々に登って海に向かって愛を誓う、そういうことになっています。」

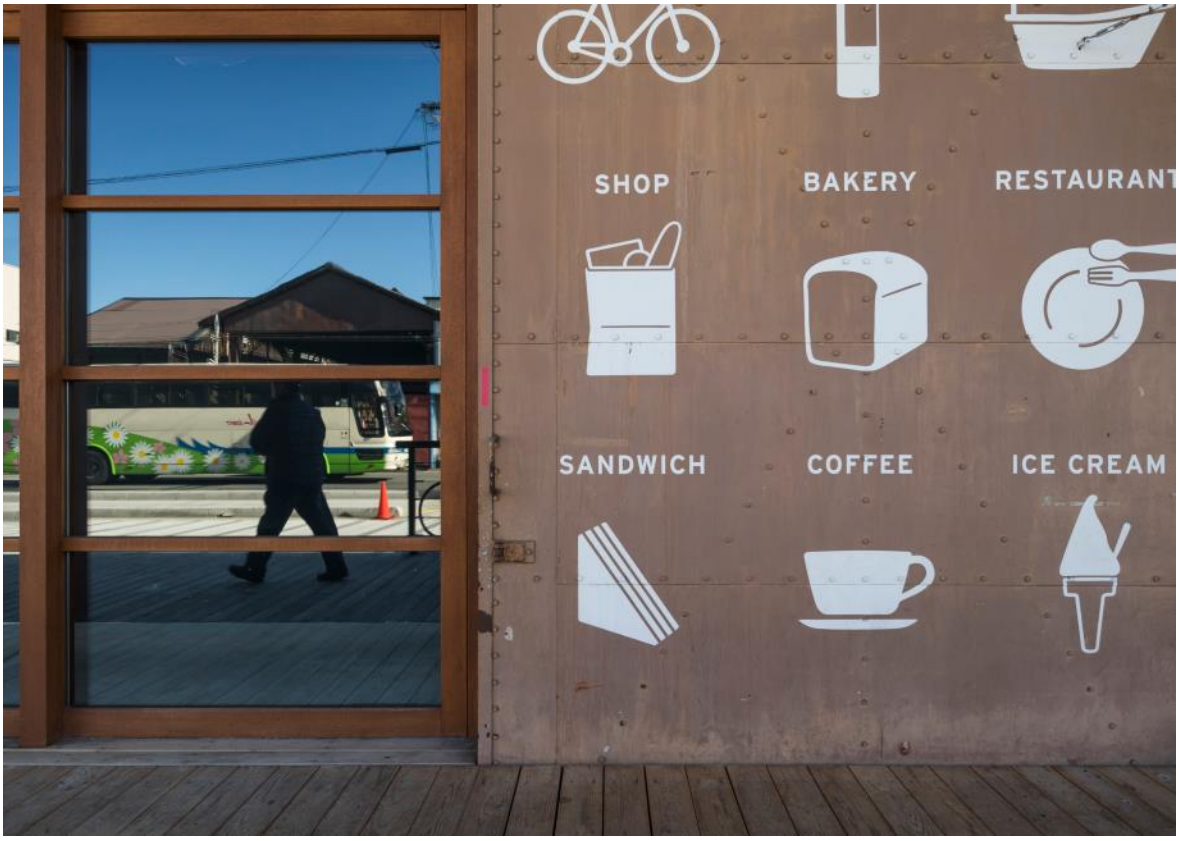


大森さん　「次、広島県の中で今一番おしゃれなのが、この「尾道」かなって思っています。」

田中さん　「そうですね。」

大森さん　「「尾道Ｕ２」というのがありますが、駅から出て脇のフェリー乗り場ですが、古い倉庫があります。それをリノベーションして、商業施設とホテルに、それも自転車に乗ったまま入れるホテルをつくりました。

大森さん　次、古い倉庫でコンクリートの庇があります。
こんな感じで古い扉があり、ショップとかパン屋さんとか、自転車とかあります。中はこんな感じ。そしてランプがかわいかったと…。「おじさんがオススメする建物」ですから。（笑）」



田中さん　「あの、ランプも建築ですか？」

大森さん　「ランプを選ぶのは建築かもしれません。建築というのは自分でつくるわけではない。木の枠をつくってくれるのはその人、壁を塗るのは壁を塗る人、この辺はある意味インテリアの設定ですが、この空間の中にどんなのがいいのかなと選ぶこと。このランプはブヨブヨっとした吹きガラスの意匠がここに合うんじゃないかと考えて、この建築家はもしかして選んだのじゃないかなと思います。この光とかが漁火っぽいとか。」

田中さん　「建築される人と内装される人は、どのぐらいコミュニケーションを取るものなのですか？」

大森さん　「たとえば銀座の街中とか、あるお店の中に入った瞬間に別世界が広がる。それがひとつの都市のあり方ですよね。でも、尾道は自然の中だから、インテリアも窓も大きく開いているし、建築とインテリアと自然にどう繋がるか、そういう意識で建築をつくっているし、インテリアデザイナーもつくっている、コーディネイトしています。」

田中さん　「ありがとうございます。」

大森さん　「次はおじさんの真打ちです。」

松隈　「「広島のモダニズム建築の魅力」です。すみません、画面からして大学の講義みたいですが。この話をいただいたときに広島のことを東京で話してほしいと言われたので、それで僕は広島の人はこの３つの建物を知ってほしいと思ったので、大学の集中講義みたいですが、こんなタイトルをつけました。」

田中さん　「講義だぁ。寝ていたら怒ってください。（笑）」

松隈さん　「丹下健三という方はご存知だと思うのですが。」

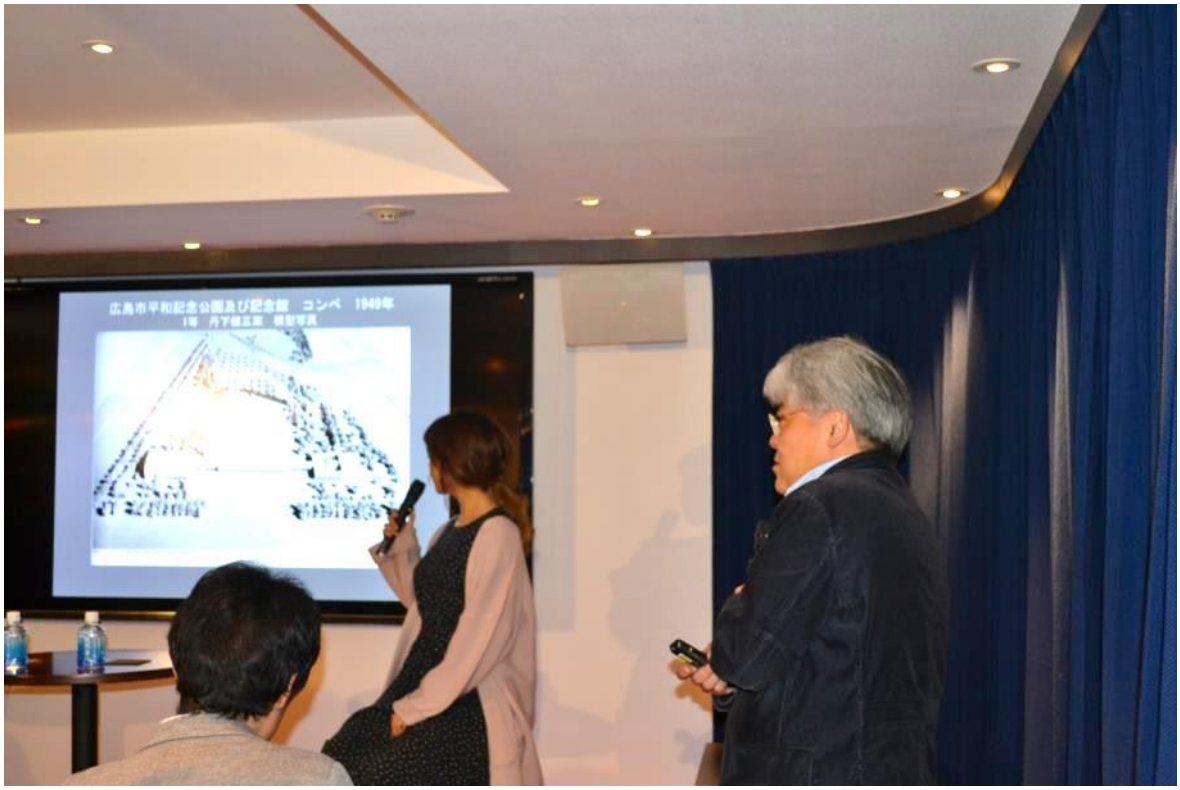
大森さん　「田中さん、丹下健三って知っていますか？」

田中さん　「名前しか知りません。」

大森さん　「そういうことをちゃんとね。丹下健三って誰だろう？わからない瞬間に皆さんの心のシャッターは閉まっていきますから。」

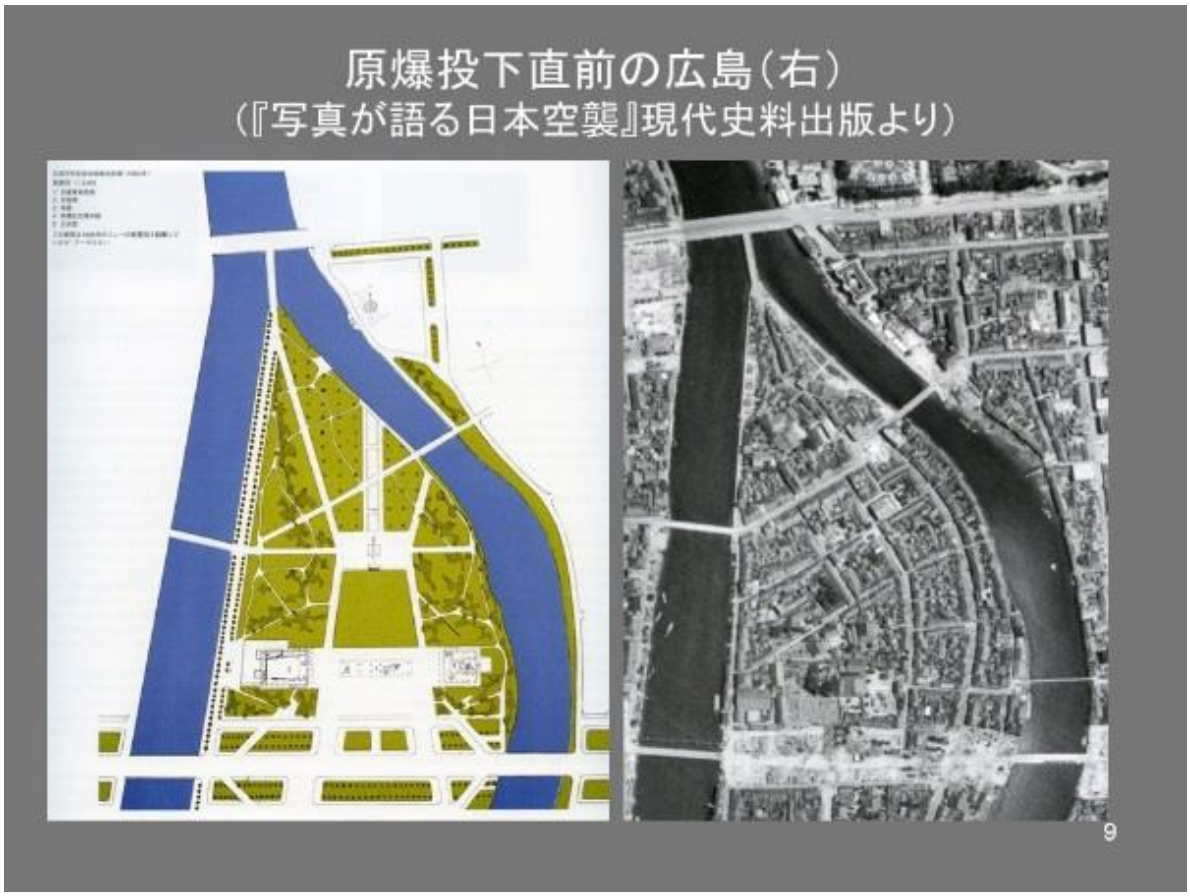
田中さん　「私、いま寝るかもしれないって思いました。（笑）」

松隈さん　「広島で育った人に絶対忘れてはほしくないと思っています。さっきの「おりづるタワー」からの映像でおわかりになったと思いますが、１９４９年にコンペが行われて、ここで１等を取って建設されました。もともとアーチがあってここに鐘を吊るす予定でしたが、それはできなくて。今は非常に綺麗な公園です、象の足のように強い柱になっていて６ｍぐらい高くて、そこに記念碑があって、「原爆ドーム」が見えるようになっています。原爆ドームに意識が集中する造形になっていますが、何でこうやったかを話したいと思います。」


広島市平和記念公園及び記念館　コンペ　1949年

松隈さん　「９６年に原爆ドームはユネスコの世界遺産になったわけで、ずっとシンボルであり続けていますが、実はこの写真、左側が丹下さんのつくった計画案で、右が原爆投下直前の同じ場所の写真です。海外の人が来たときに「ここが公園でよかったですね。」と言われますが、町があったことを知りません。そういうことも伝えていかなければならない。もともと原爆ドームは産業奨励館という立派な施設でしたから。

松隈さん　「丹下さんはなんで、あんなプロジェクトをしたか。丹下さんは実は旧制の広島高校のご出身で、原爆が投下されたときは東京で先生をされていました。やっぱり自分の級友たちを原爆で失って、どうしても復興計画は僕がやりたいといって丹下さんが乗り込んでいったのが翌年の９月。ちょうどそのときの写真がありますが、丹下さんは調査に入り、原爆ドームというのがこれから伝えていくには重要だと考えてつくった案で、みんながここに来たら原爆ドームに焦点が集まるような造形をしようと思いつくりました。」



松隈さん　「僕は（丹下さんが）生きているときのその話はできなかった。知らなかったから。そして被爆から１０年目に大きな資料館ができたので、大きな式典があり、５万人の人が集まりました。この写真はたしか毎日新聞の写真だと思いますが、「何でみんな海の方を見ているのだろう。」と不思議で仕方なかった。むしろ逆（原爆ドーム側）を見なきゃいけないのに。」

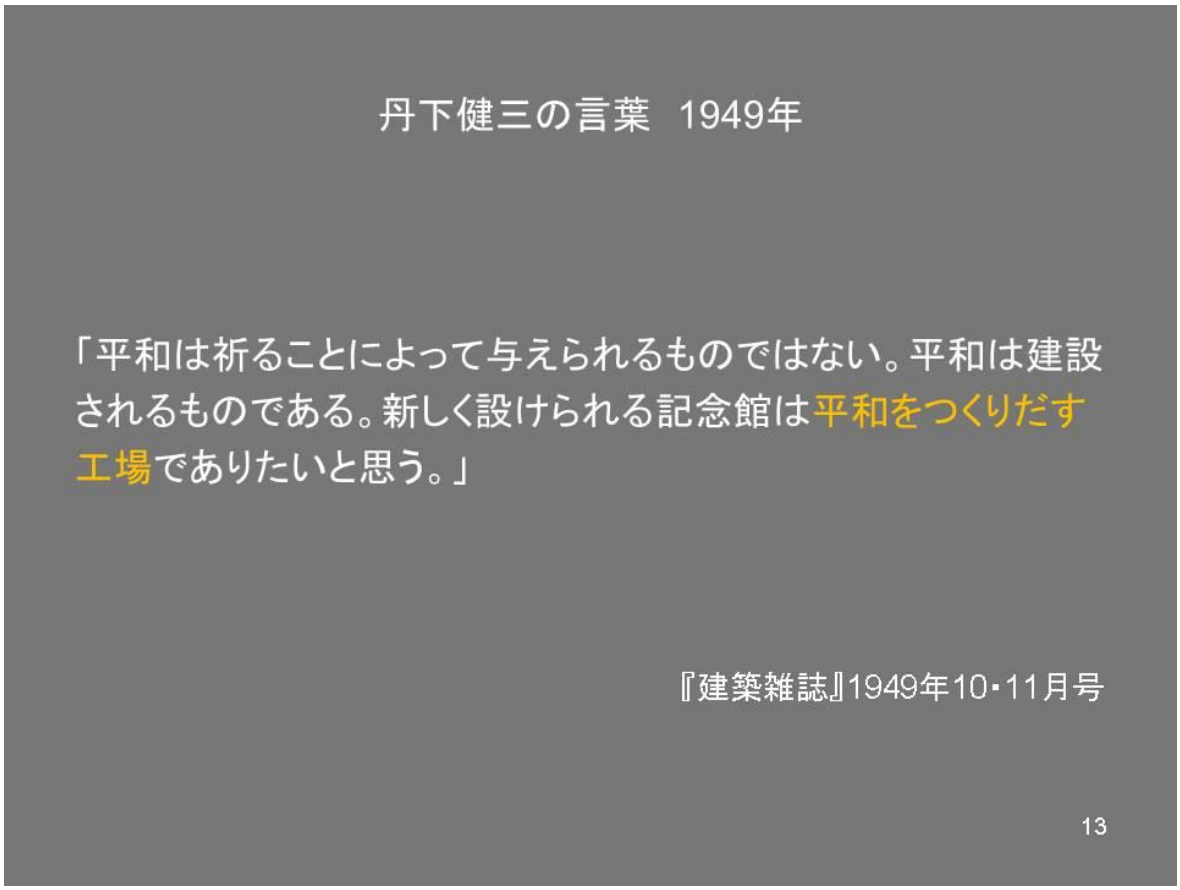
松隈さん　「ですが実はこうなっていたのです。つまり原爆ドームはあるし、慰霊碑もあるけれど、手前から見ると見せられない状況がおきていた。つまり行き場所を失った人たちがバラックを建てて住みはじめていたのです。だからこの式典では後ろを目隠しして行っていました。こういう状況がかなり長く続いています。丹下さんが１９４９年に原爆ドームを残そうとコンペで１等になって、でも原爆ドームが残ることが決まったのは、１７年後の１９６６年です。つまり丹下さんだけが、最終的な形を頭の中でイメージできていて、このような形にした。もしかしたら、丹下さんの案が１等ではなかったら原爆ドームは無くなっていたかもしれない。そこまで見越していたと思います。」

田中さん　「当時、原爆ドームって価値があるものだったのですか？」

松隈さん　「当時の広島の中学生が、それこそ折り鶴を折って原爆ドームを残してほしいという署名活動をしていた記録もあるそうです。いろんな人の思いがね。被爆で中学生が亡くなって、その子は原爆ドームがある限り、私たちの受けた被害を次の世代に伝えられるという手記が出てきて、そのようなことがいろいろ重なる中で丹下さんが、プロジェクトをつくった。でももし丹下さんがつくっていなかったらどうなっていたかなと考えると、僕たちが当たり前のように見ている公園が実はこういう姿をしていた…」

田中さん　「はじめて知りました。」

松隈さん　「丹下さんはそのときに「平和は祈るために与えられるものではない。平和は建設されるものである。新しく設けられる記念館は平和をつくりだす工場でありたいと思う。」つまりここに来れば、なぜ原爆が落とされたのか、何を学ばなければいけないのかを知る場所になっている。祈る場所じゃない。ここには級友たちを失った、自分が高校時代を過ごした場所が全く無くなったことを建築の力によって次の時代に伝えたい、そんな丹下さんの思いがあったんですね。 すみません、ホントに集中講義みたいになりました。（笑）」



松隈さん　「そしてもうひとり、戦後の建築家で忘れてほしくないのが、この村野藤吾です。村野藤吾こそ知らないですよね。」

田中さん　「はじめて聞きました。」

松隈さん　「大森さんはインタビューに行ったことがあるんじゃないですか。」

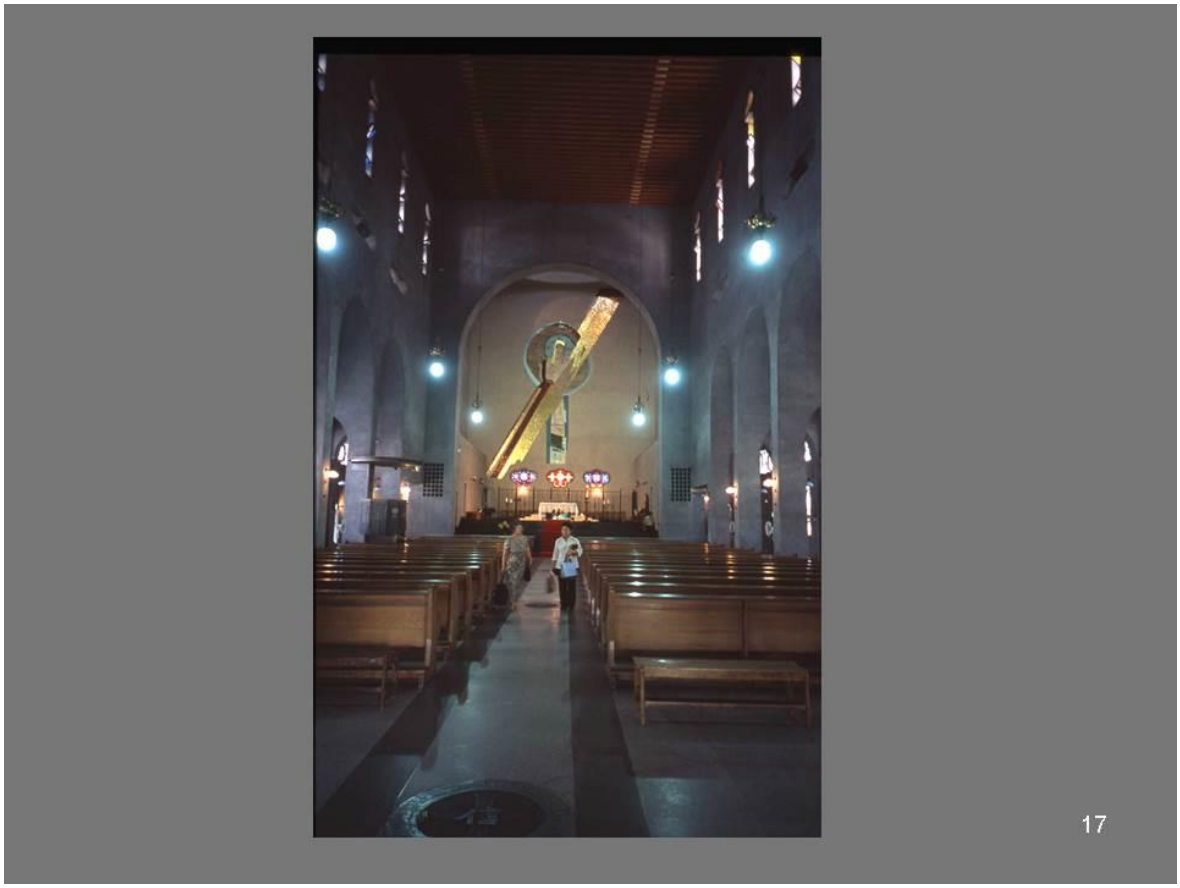
大森さん　「ありますよ。新高輪プリンスの写真をお持ちして「どうでしょうか」と伺って、村野先生は万年筆で書いてぼかしを入れて、こんな感じに撮ってくれないか、なんてことがありました。」

松隈さん　「僕は講演会で遠くから見たぐらいしかありませんが。村野さんが「世界平和記念聖堂」を丹下さんの２年前につくるわけです。」

村野藤吾　世界平和記念聖堂　1953年

15

田中さん　「わたし、ここのふもとの幼稚園で育って、母も叔母もみんなここで育って、しかもここの横のエリザベート音楽大学が併設されていて、そこで高校までピアノとかサルベージとか習っていて当たり前の場所だったので、この話になったときにびっくりしました。」

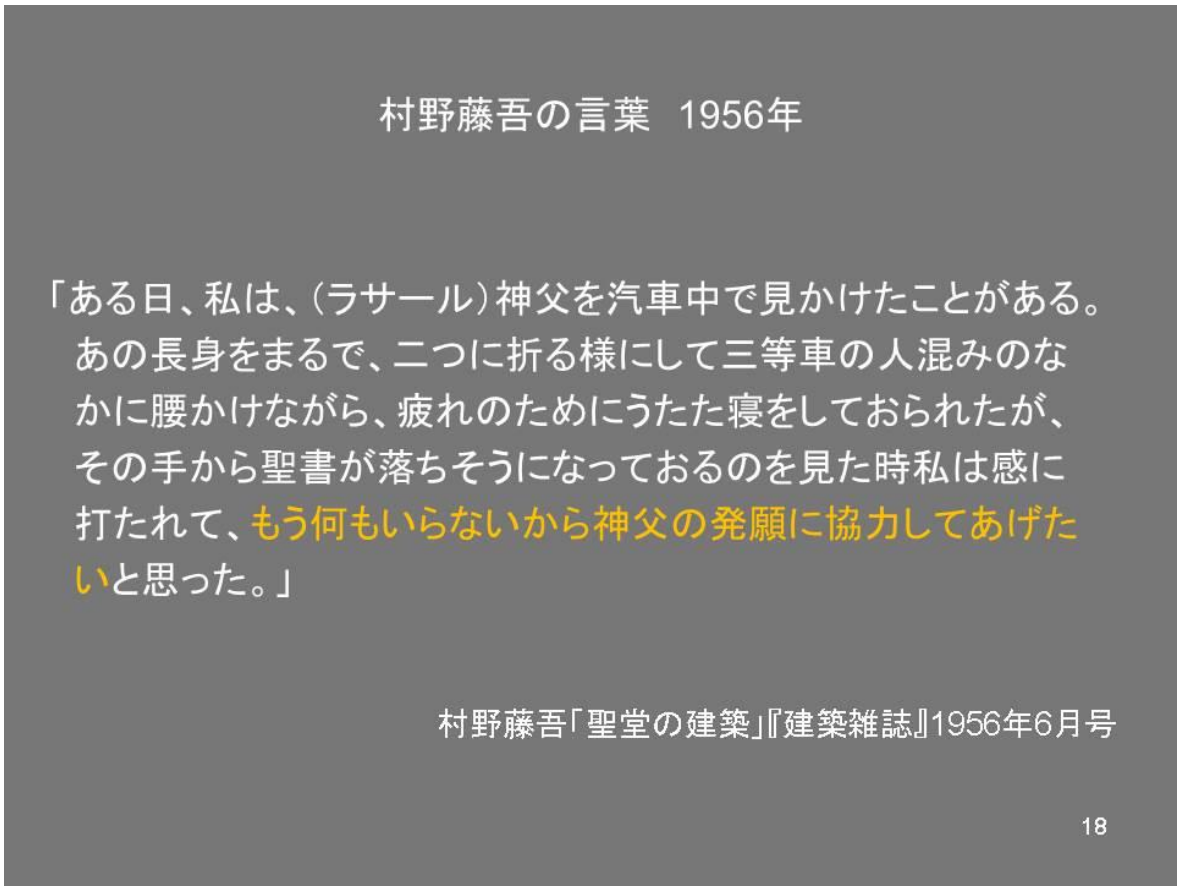


松隈さん　「いつの時代につくられたのかわからないぐらいすごく古びて見えますが、１９５３年、今から６５年前のものです。」

田中さん　「えっ、そんなもんですか。」

松隈さん　「意外と新しく、もっと前からあるような建築で、ロマネスクの教会みたいでしょ。で、実は村野さんはこれについて設計料はいらないってやったんです。いろんなことがあったのですが、ここのラサール神父さんというのがここで被爆され、戦後生きていく信者のために世界からお金を集めてつくろうということになりました。

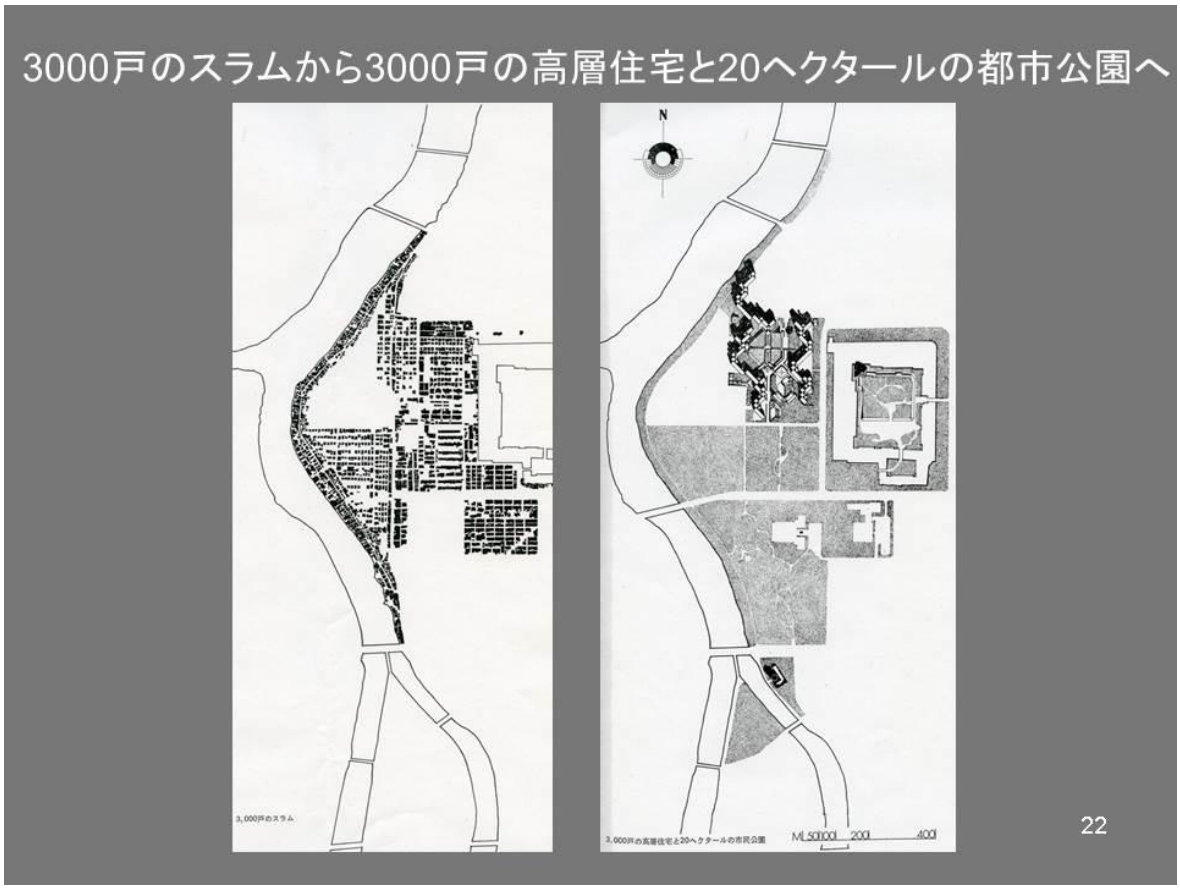
実は村野さんは建築界で一番権威のある、建築学会賞を受賞しましたが、そのときの村野さんの文章で、ラサール神父が資金集めで奔走して３等車？に乗っていて、転寝をして聖書を落としそうになったのを見たときに、「私は何もいらないから」と言われたそうです。亡くなる前の年に聖堂でシンポジウムがあったときに、お金は受け取らなかった、そういう思いでみんながつくっているなら自分も無償で設計したいと。これも広島の戦後として忘れてほしくない建築です。２００６年に今日話した２つの建物が戦後の建築としては初めて国の重要文化財になりました。朝日新聞の記事が、戦後初が広島からとしたのはひとつの意思だろう。つまりこの２つは日本の戦後を考えるときに忘れてほしくない建築の仕事だろうと。すみません、集中講義みたいになりました。（笑）



松隈さん　「最後にもうひとり、大高正人。まさに全くご存知ない人がほとんどかと思いますが。でも今の話の続きでいくとやっぱり大事な仕事をされた方です。」

松隈さん　「写真は、右が広島城で、横に屏風のような「高層アパート」が見えると思いますが、あれをやりました。今だと高層アパートはあちこちあるので大したことはないと思うかもしれませんが。」

松隈さん　「左がアパートが建てられる前のもの。住宅を黒く塗って示しています。で、同じ場所でアパートができてどうなったかが右側です。下に原爆ドームが描かれています。先の写真じゃないけど、やつぱり住むところを失った人たちが住みはじめて、なんと川岸に、ここにも木造のバラックができてしまう。これは広島県、広島市の戦後の最大の課題で３千戸のバラックをなんとかしないといけない、ということでここに高層のアパートをつくって、ここを２０ヘクタールの都市公園にしようとしたプロジェクトになります。ですので、黒い点が全てあそこに入っていくわけです。」



大森さん　「田中さん行かれたことはありますか。」

田中さん　「普通に通り道というか、広島の町は狭いので、普通に生きていると、はい。」

大森さん　「足元は柱だけだから、ほとんど通っていけるという。」

松隈さん　「これは一昨年だったかな。大高さんの展覧会をやって、広島大学の学生さんたちに、アパートがあって、一番奥にピースセンターがあって、広島球場があるという全体で２ｋｍぐらいあると思いますが５００分の１の模型を、４ｍぐらいの大きさになりますがつくってもらいました。逆に見ると丹下さんの建物（平和記念資料館）があって、原爆ドームがあって、広島球場があって、その奥に高層アパートがあるという、広島の戦後の建物が並んでいます。広島球場も実は戦後の復興にとって重要でした。」

23

大高正人　広島基町高層アパート　1970～78年

25

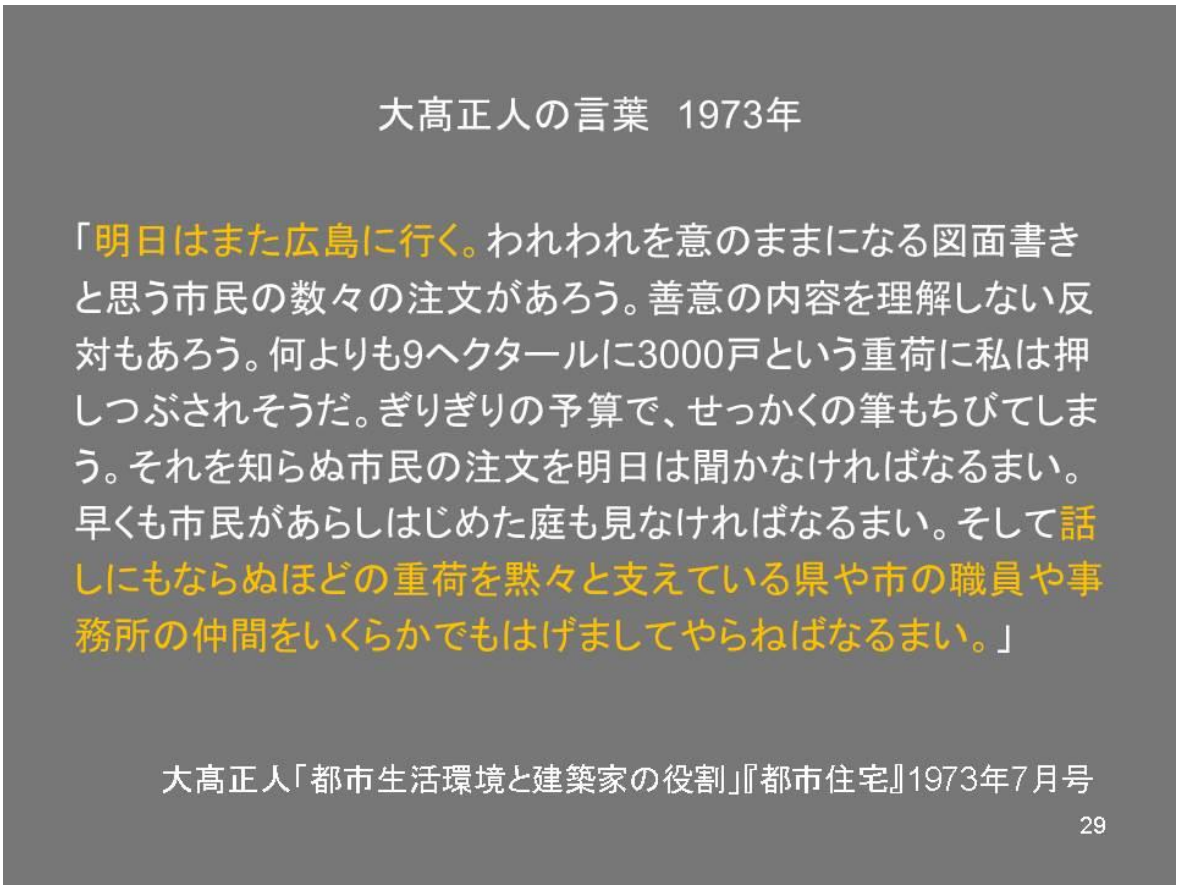
大森さん　「今はスタンドの一部が残っているだけですね。」

松隈さん　「そうですね。それで高層アパートのおもしろいところは、ずっと屏風型の庭園が広がっています。真ん中のところは上が屋上庭園で、下が商店街になっている建物です。」

松隈さん　「これも僕が広島の市民団体「アーキウォーク広島」のお誘いを受けてはじめて屋上に上がったときのものですが、本当にここにくると先ほどの「おりづるタワー」に近いけど、広島の両側の山並みと川と地形がよくわかってすごく素敵なんですよ。そして屋上が繋がっていて、高速道路の街頭が立っていたりして。昔は誰でも上がれたようですが、不純異性行為の場所になってしまい、まずいだろうって今は鍵で管理をされています。これ、１．２ｋｍくらいあって。こんな不思議な場所があります。」

28

松隈さん　「そのときに、大高さんが現場に通っているときの文章です。ものすごい重圧の中でプロジェクトをやったことがわかります。
以上の３つは、広島の人は知っていてほしいし、広島に行ったときにこれを見ると広島の戦後はこうやってはじまったのかと思うはずです。」



大森さん　「おさらいしましょう。」

松隈さん　１つ目は、丹下健三の「広島平和記念資料館」と「平和公園」。２つ目は、村野藤吾の「世界平和記念聖堂」。３つ目は大高正人の「基町高層アパート」です。

大森さん　「広島の話をするときに、この３人の話をすると、この人は建築わかるなって絶対になりますから。（笑）ありがとうございました。」

田中さん　「私の中で建築ってなんだろう？って思っていたのですが、文系の頭なので、たとえば物事を把握するときは「言葉」がないと概念が生まれないと思っていて、みんなで同じものを共通認識するのに「言葉」があると思っています。だからこそ新しい「言葉」が創りだされていく。それはある意味、「建築」もたとえば原爆ドームは、丹下さんがここから見るという意味を描けて創りだす、概念を創りだす。「建築」もそういうところがあるんだなと思って、とてもおもしろかったです。」

大森さん　「何かをつくるというのは「言葉」がないと通じないかもしれないけれど、今度はそれが「建築」されたら、その言葉がなくても何かが感じられるようになるかもしれない。」

田中さん　「そう、そうなんです！だから「言葉」がなくても「建築」が共有できる何かになるんだと思いました。」

大森さん　「すばらしい。」

松隈さん　「これで９０点はありますね。（笑）」

～おじさんたちがインスタ映えする建物をご紹介（大森さん，松隈さん）～

大森さん　「「インスタ映え」っていうことをあまり理解できていないのですが…。」

田中さん　「若者はすでに「インスタ映え」は飽きてきているので。」

大森さん　「「インスタ映え」ってなんですか？」

田中さん　「写真に映えるということですが、「インスタ映え」という言葉が流行りすぎて、おじさんに「これ、インスタ映えでしょ？」って言われるのが、若者はちょっとイラッとくるんですよ。（笑）
ただ写真を撮りたくなることはあるので。フォトジェニックだったり、写真を収めたくなる風景だったり。女子は大好物だと思います。「インスタ映え」を乱発しすぎると、女子は「あれ？」と思ったりしますよ。」

大森さん　「これはさっきの県庁舎ですが。ここで見ていただきたいのは、「ガラスの歪み」です。６２年前にできたもので、窓枠は鉄です。現代はアルミサッシですよね。鉄のサッシに磨き板ガラス…」

田中さん　「これは何が「インスタ映え」ですか？ここから写真を撮ったらいいとか？」

松隈さん　「このガラスの歪みです。相当なディテールの話をしています。（笑）」

田中さん　「えー！気づかなかった。ごめんなさい！この角度から撮るとか、そんな話かと思っていました…どうでしょう？みんな。」

大森さん　「建物の中と外がすっと繋がりながら、途中にフニャフニャとしたものがある。これは古い建築ではなくても、きっと気持ちいいことだと思うんです。実は他もガラスをテーマにして撮ってみました。」

松隈さん　「さすが編集者だね。（笑）」

大森さん　「これはベラビスタのレストランで、美味しいけれど、少々お高いのですが、レンタカーで行ったのでノンアルコールビールです。そこにレストランが映っている。細い柱が見えている。」

田中さん　　「これはいいですね。瀬戸内海が見えていたり。」

大森さん　　「このときの気持ちよさと、ビールだったら良かったのにというくやしさがこもった写真です。」

田中さん　　「なるほど。」

大森さん　「これは尾道ですが。「インスタ映え」って田中さんのものを見ると本人が写っていなきゃいけないのかと思って、あまり写りたくはないけど、一応写りました。」

田中さん　「かわいすぎますね。」

大森さん　「これ、「Cycle Through（サイクルスルー）」って書いてあるでしょう。ドライブスルーのように自転車でものが買えるレストランです。それで建物の方向を見ているのですが、海が見えて山が見える。つまりここにいると建物も見られるし、裏側の景色も見える、そういう「インスタ映え」を狙ってみました。」

田中さん　「たしかに！そしてこれだけで何ってこともわかりますし。「インスタ映え」ですよ。それにしても、やっぱり「青」が青いですね。海も空も。」

大森さん　「明るい青ですよね。これが日本海に行くと暗い青でね。」

田中さん　「不思議です。」

大森さん　　「瀬戸内海から日本海に渡ったことがあるけど、全然色が違います。」

田中さん　　「そして瀬戸内海は波がないので、そこの海を見て育ったから、こっちへ来て江の島とか日本海を見たときに、台風？って思うぐらい。」

大森さん　　「これこそ海を見ている林芙美子が見た風景ですね。次は松隈先生！」

松隈さん　「僕の写真は全部フィルムカメラで、インスタはしていませんが。
せっかくだから東京都内で見られる丹下、村野の話をしようと思って。やっぱり広島でやっていることと繋がっていて、これはもしかしたらご存知ですか。」

大森さん　「「インスタ映え」とは違うような…」

松隈さん　「だって仕方ないよ。インスタをしていないから。（笑）」
「広島と同じく人間を超えた建築の良さみたいなものを感じるかなと思って。」

田中さん　　「これ千駄ヶ谷の国立競技場のアレですよね。」

松隈さん　　「吊り屋根で、ものすごくダイナミックで。中に入るとこんなに大きな空間で。今もいろんなイベントに使われていますが。」

大森さん　　「スケートしたことあるよ。プールで飛び込み台もあってかっこよかった。」

松隈さん　「丹下さんは同じ年にこういうものもやっています。」

田中さん　「目白？ですよね。わかります。」

松隈さん　「結婚式をよくやっていますが。」

田中さん　「丹下さんの建築物にたくさん行っていることを今更ながら気づきました。それを知らずに、です。」

松隈さん　「そういう建築の出会い方は、業界にいるとよっぽど幸せじゃないかって思いますね。これとこれは同じ建築家なんだ、みたいな発見とか。」

大森さん　「建築学科に入ると、丹下健三の作品は見なきゃいけないってなるんです。」

田中さん　「「見たい」が「見なきゃ」になるんですか。」

大森さん　「僕も最初に建築学科に入って、広島の平和資料館の写真を見て「なんか四角い建物だな」って思っていて、小さなモノクロの写真だけじゃわからなかった。でも実際に行ってみると、天井の高さとか、スケール感と言いますが、昔の入口の折返しの階段があって、手摺の高さとか、自分の大きさと大きな軸の中に構える建築があって、感激しましたね。」

田中さん　「知らなくていいことかもしれないけど、「建築」という見方があるとちょっと深みが出て、ぼんやり気持ちいいとか、思考に深みが出てこれから行く旅行が楽しみになりました。」

松隈さん　「人間がつくるもので、こんなに荘厳なものがつくれるのか、コンクリートで、みたいな。ちなみにここの地下には丹下さんご自身のお墓もあります。」

田中さん　「へえ…。」

松隈さん　「次は突然、村野藤吾になります。渋くいきます。戦前で、８７年前のもので今でも神田にあるばりばりの現役ビルです。窓が外壁と同じでシャープな感じ。屋上に線がありますが完成したときに照明が入っていて光るようになっていたらしく、スタイリシュな建物でした。でもこれってモダンなだけだよねと思って中に入るとエレベーターロビーが写真のような感じで。村野は何を考えていたのかなって思います。村野さんって人を突き放さない建築というか、むしろ感情移入しやすい建築を丁寧にしていますね。」

田中さん　「これって何の絵柄ですか？」

松隈さん　「わからないです。理屈で解けないところがあって。丹下さんは理屈で解けるけど、村野さんは違うかな。」

松隈さん　「これは知っているかな。日生劇場です。日比谷公園の目の前ですが、１９６３年と言われればそうかと思うし、もっと前と言われればそんな気もする。いま再開発がすごい場所で、周りはどんどん建て替えられ、今はここしか残っていないかもしれませんが。ちょっと不思議でしょ？この造形。石で細かく造形をしていますけど、中に入ると突然モダンなアルミの天井で、幾何学的な模様があり、外観と違い白く華やかなシャープな感じになっていて、でも上にあがるとホテルのロビーみたいな空間で、照明も丁寧に仕込まれてあり、椅子ひとつにしても丁寧に村野さんがデザインをしています。ホールの天井はアコヤ貝を使って、ものすごく有機的な作品です。」

田中さん　「こんな洞窟ありそう。」

松隈さん　「男性的な丹下と、女性的な村野、どっちが好みかはわかりませんが、全然違う建築だなと思っています。」

松隈さん　　「そしてこれ、三鷹にあるキャンパスです。これが大阪万博の前の年につくられたものですが。」

田中さん　　「トランスフォーマーに変形しそうです。」

松隈さん　「閉鎖的な修道院のような建築で、これがチャペルですが。どこからこの造形が出てきたのか。中に入ると意外に明るくて、５０年近くなりますが、椅子なんかも村野さんのデザインされたものがいまだに使われていて。桜が綺麗なＩＣＵが隣にありますし、春に行くにはおすすめです。事務局に行くと見学できるみたいですよ。大学のキャンパスって狙いめで、基本的にはウエルカムのところが多くて、大学めぐりをすると目が肥えると思います。」

大森さん　「東京大学にも丹下健三の建物がありますね。」

松隈さん　「そして中工場の谷口さんをやったので、ぜひ東京は葛西臨海水族園ですね。」

田中さん　「完全に授業になっていますね！（笑）」

大森さん　「わかりました。これらの写真が「インスタ映え」ではなくて、ここらで「インスタ映え」の写真が撮れるということですね。」

松隈さん　「そうです。ロケ地めぐりみたいなものです。」

「ここもネギ坊主みたいなものしか見えないのが、どんどん近づくと空が広く見えてきて、円形の浅い池があって、向こうに見えるのがディズニーランドのホテル群です。一番感心したのは、手前の浅い池と向こうに見える東京湾の水面と、やはりひとつの建物でいろんな風景が見えてくる、建築のすごさ。谷口さんはそんな建築をしていて本当に埋立地でこれをつくるだけで風景が変わってくる。ディズニーランドって完全に周囲を遮断しますが、谷口さんがつくったのは真逆で周囲も味方に入れて、ここで最大限味わってもらおうとするところがある。ビフォーを知らないけれど、原爆ドームと同じで、前（以前）を知ると建築家が何をやったかが見えてくるんです。」

田中さん　「文化ごと変えるってことですか。」

松隈さん　「風景の見え方ひとつも変わってくるし、どうしようもない場所が素敵な場所に変わる建築ができるので、そこらがわかってくるとおもしろくなると思います。最後の写真はマグロが回遊していますが、決して一人で行く場所ではありませんでした。(笑)」

53

松隈さん　「あとひとつ、コルビュジエの西洋美術館が世界遺産になりましたが、１９５５年にコルビュジエが一度だけ日本に来て敷地を見るのですが、縁の場所で写真を撮ったらいいなというのが麻布にある国際文化会館。これ構えが偉そうだから入りにくいのですが、実は誰でも入れるので、ぜひ行っていただきたいのですが、コルビュジエが訪問しています。１階のところは大矢石を使っていて透明感があって、向こうに小川治兵衛の庭があります。そして屋上には芝生庭園がありますが、コルビュジエはここに来てスケッチを残しています。ちゃんと大矢石のことも書いてあって、素材とか。そして芝生のことも細かく書いています。もしかしたら西洋美術館の屋上に芝生の庭園をつくりたかったのかなと思ったりします。庭から見ると写真のような感じ。喫茶店になっているからせひ行かれるといいと思います。」

松隈さん　「そして「インスタ映え」ですが、左がコルビュジエが国際文化会館を訪れたときの写真。６３年も前です。そしてこの写真と同じ場所に立てるということが言いたくて。実はこれは私が日本の代表をしている近代建築のドコモモという世界組織があって、ポルトガル人の会長が来たときに、機関誌で、国際文化会館でインタビューをすることになり、最後どこかで写真を撮ろうとなったときに、コルビュジエと同じ場所に立とうと彼女を誘いました。」

国際文化会館を訪れたル・コルビュジエ　1955年11月4日

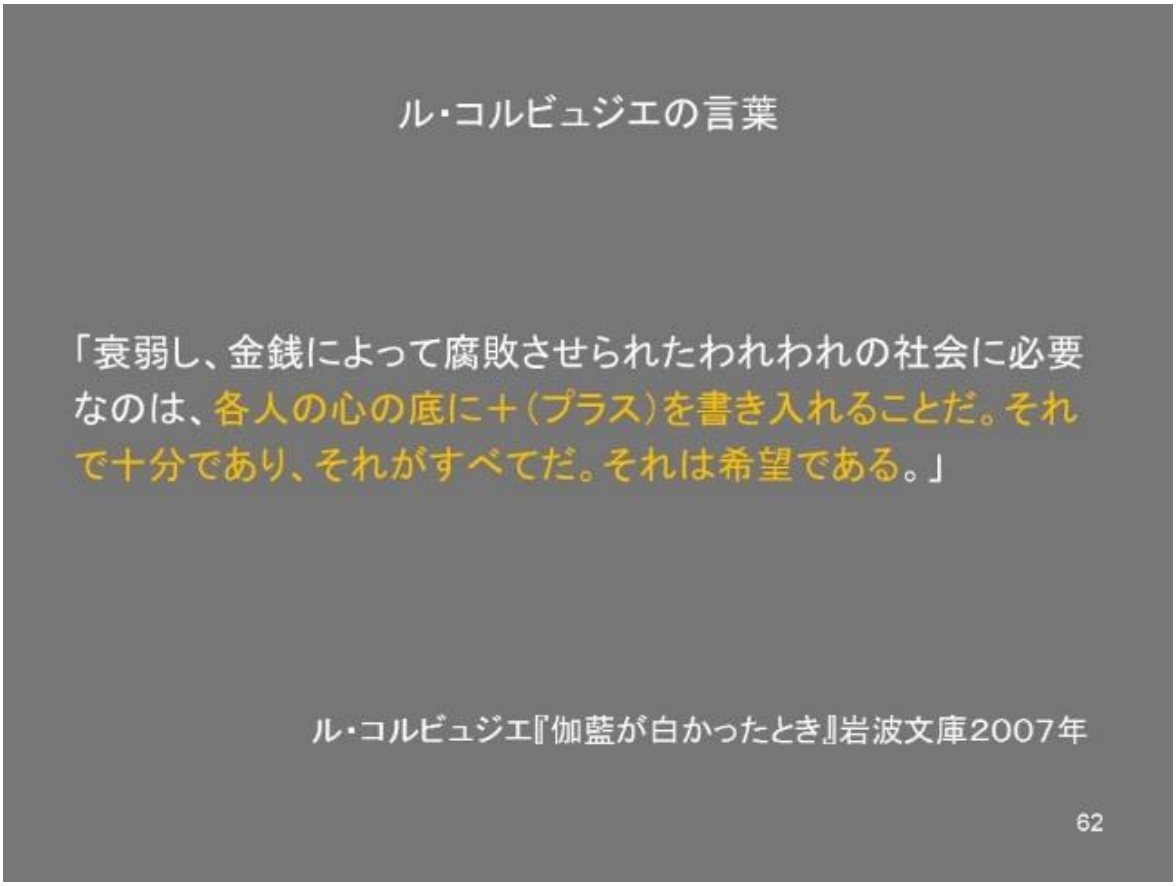
60

国際文化会館の機関誌『I-House Quartely』2017年夏号
ドコモモ・インターナショナルのアナ会長と

61

大森さん　「これは、かなり「インスタ映え」ですね。」

松隈さん　「６３年前と同じ風景で写真を撮れる、あるというのがすごいことですね。コルビュジエって有名になったのに、どんな思いでつくっていたかとか。社会の人は「この建築家は何を考えてこの建築をするのだろう」とか知るきっかけがありません。だから建築家が残した言葉をできるだけ残そうと思っています。で、コルビュジエはこんなことを言っています。」



松隈さん　「つまり、建築は人々に希望を与えるためにつくられていると、コルビュジエは残していて、建築の最大の社会的な役割はそんなことかなって思います。」

田中さん　「「インスタ映え」っていろいろあるなと思っていて、誰かからの“いいね”がほしかったりするんだけど、本来は自分の“いいな”と思ったものを載せるべきだと思うので、多種多様でよくて、本当に好きなものだったり良いと思ったものを載せればいいので。みんなが好きなものが全然違ったのでそれが楽しいと思いました。渋めだったり、細かかったり、人によってはその「歪み」が震えるぐらい好きだったりして。最初のきっかけとしては「これ、なんだろう」と思うことで、そこからの言葉であったり、つくられた人の意図にいくわけで、いろんな人がいろんな入り方でもっと「建築」を楽しめればいいのかなって思いました。」

～こんな街並み，建物へ行くときの旅コーデはこれ！（田中さん）～

大森さん　**「松隈先生の講義も終わりましたので、ここからは建築を抜けて、建築を楽しむ観点で田中先生からお願いしたいと思います。」**

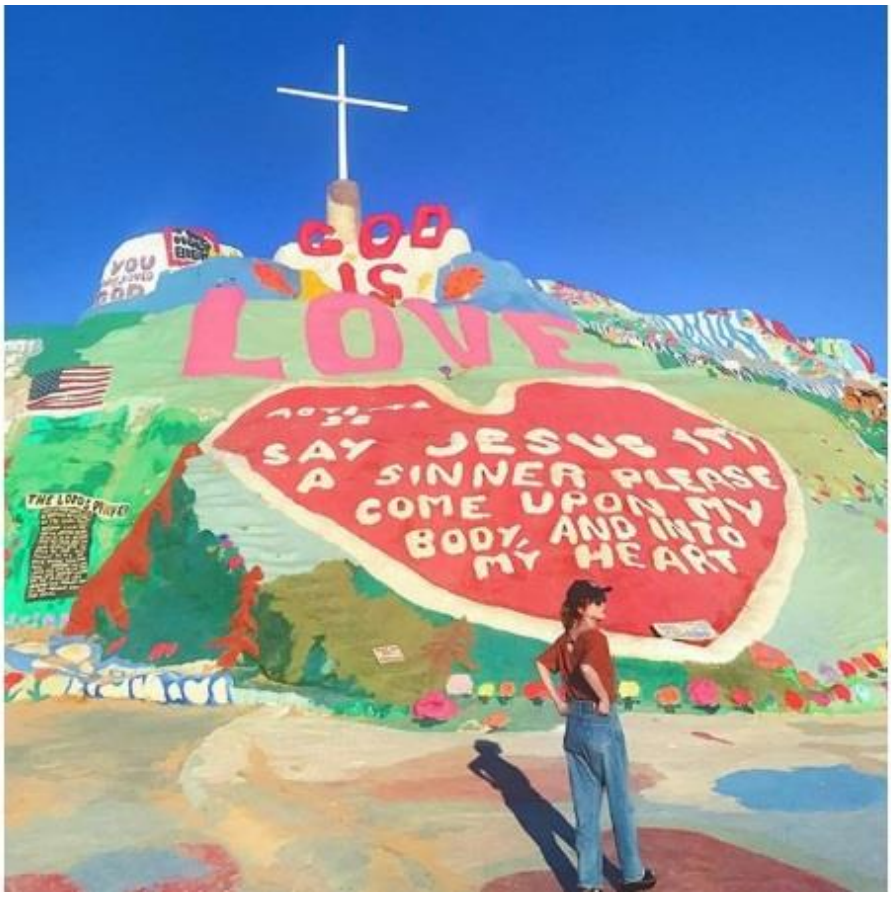
田中さん　**「えっ～！それなんですか。材料として用意されているのが、たぶんお洋服とかの話だと思うんですけど。（笑）」**

田中　写真はグアナファトというメキシコの世界遺産にも登録されている街並みで、一戸一戸が手塗りですごいカラフルで、高い所に上がって撮った一枚です。ここの空もすごく鮮やかだから、この色も映えるんだろうねって。ここに住んだら何色にする？みたいな。隣とも兼ね合いもあるよねって、友達と話しをしながら歩くのが楽しくて。

大森さん　　「コーデは？」

田中さん　　「この流れでファッションといっても難しいですが…。ファッションは、「私はこれだ」というものを着ているよりも、ＴＰＯじゃないですが、行く場所にあわせて服を変えると、ちょっと気分もそこの文化にすり寄るので、場所にあわせてコーディネイトしています。」」

田中さん　「次、サルベージョンマウンテンといって、ロサンゼルスから車で４，５時間かかる砂漠の荒野に一人のおじいさんが３０年掛けて建てたものです。ホントに砂漠の中でこれだけなんですけど。彼が表現したのは「神への愛」。愛を伝えるため、神だけを想いつくったそうです。ディズニーランドっぽいですね。それっぽい格好で行っています。」



田中さん　　「次は、先ほどのグアナファトに行ったときのものです。花も咲いていてカラフルでごきげんな感じです。」

田中さん　　「次は台湾ですね。えっとどこでしたっけ？」

客席さん　　（九份！）

田中さん　　「そう、九份。めっちゃ、行っているのに。よくある坂道ですが、ここに合うんじゃないかなって、着て行ってみたりとか。」

田中さん　「これは先ほどのカウンティ美術館ですね。最後はなんだろ、こんな服着てどこかに行ったらいいんじゃないって、入れたのかな。そんな感じです。」

大森さん　「やっぱり建物を感じるのと、自分の装いで気持ちを表すのと、関係ありますよね。」

田中さん　「関係あると思います。少なからず、どんな自分が行くと気持ちがあがるかなとか。自分がどう思われるかよりも、自分はどういう服を着てここで過ごしたいかという旅の過ごし方ですね。

お洋服をすり合せるだけで、なんとなくそこに馴染んでいる気になるし、楽しみ方があるんじゃないかな。」

大森さん　「松隈さんは、やっぱり丹下健三を見るとき、コーデは考えますか？（笑）」

松隈さん　「丹下さんは、神聖な場所をつくっている感じがあるからね。たとえば平和公園でサッカーするわけにいきませんし。建築がおもしろいのは、そこにどんな空気が流れるか全然違っているからね。僕は人間くさい建築が好きだから、丹下さんのものは偉そうな気がしますけど。」

大森さん　「ちょっと緊張するわけですね。」

松隈さん　「何をしてもいいよという建築もあれば、ここはだめよっていう建築もあるし。」

大森さん　「着るものも、ここにこんな格好してきちゃだめよ、とかありますからね。」

田中さん　「ありますね。」

～質問コーナー～

大森さん　「今日は「女性を惹きつける建築」というテーマでお話しを伺って、そこからどんどん広がって。松隈さんは建築を世の中に伝える伝道師ですから。」

田中さん　「たしかに建築家の言葉って伝わりづらいから…。もしかしたら建築家の思ってもいないところで一人歩きすることもあるかもしれないし、でもそれはそれで意味のあることだと思います。」

松隈さん　「建築って誰もが接することができるものだから、設計者の手を離れてそれが生きるかなって思います。」

大森さん　「今日、田中さんから伺った、建築は言葉がなくても伝わるんだ、とか、素晴らしい言葉、今度使わせてもらおうかなと思いました。
ここからはせっかくなので質問なんかどうですか。感想でも。」

男性１　「今日はありがとうございました。トークイベントは東京広島県人会から頂いて、当たってよかったです。今日のポイントは田中里奈さんがいたことだと思います。率直に感じたことは、建築というのは建築家や設計者だけにつくらせてはならないと、先生方を前にして失礼なのですが。特に今日の話で期待をしたかったのは、「インスタ映え」って言葉が何度も出てきましたが、もともとインスタントなものなので、本物ではないから続かないと思うんです。だから去年流行語大賞なのにもう使われなくなっていて。建築って我々１００歳生きられないか難しいですが、それ以上に生きていく存在で、そういった本物に差し迫っていく話が大事なことだと思いました。
少し長くなりますが、もう少し二点気になることがあって、広島は世界の人が知る都市だからこそ、もっとユニバーサルデザインが当たり前に組み込まれているものをはじめて「建築」だと言ってほしい。そうじゃないものは、なんちゃって建物として取り壊していくような覚悟があってもいいかなと思います。それはなぜかというと、今から５年前に菓子博があったときに、誰もが来ていいユニバーサルデザインになっていなかった。このことが突っ込まれて大変なことがあった。そしてもうひとつは、広島の集中豪雨があったときに、安佐北区とか南区が相当なアタックを受けたことがあった。そうしたときに私は広島の出身ですが、中区に人が住まなくなって山の方へどんどん切り開いていかれた。そのお鉢があたってしまったのかもしれません。そういった流れを戻していくことも大事じゃないかと思いました。
住んでいる人も誇れて、帰省したときも訪ねていけるようなランドマークがあれば、来訪者もそこへ足を運ぶのではないかと思うのですが、そんな街づくりが原爆のあとの文化とか歴史とかがあるので、写真を撮って楽しむときに、背景とか歴史とかをしっかり伝える深みをもっていたものが将来に繋がるのかと思います。今日はそんな視点でこのような機会がありましたので、所感を述べさせていただきました。ありがとうございました。」

大森さん　「ちょっとだけ申し上げたかったのは、私は今日、広島県庁舎をお載せしました。やっぱり広島の中心は丹下さん、村野さんですが、あの県庁舎もいかに丁寧につくられているか、そして６２年間もっていること。その時間の流れを見るとなぜそれがあるかが段々わかってくるか、それをわかってほしかったのが今日の私のプレゼンでした。」

松隈さん　「僕は一番大事だと思う３つを取り上げましたが、実は田中さんの話の中にありましたが、ふだん自分が接していた建物がそういう歴史を持っていたのかと知ることこそ重要だと思っていて、僕もふだん使いしている県庁舎もそうだし、日常にある優れた建築に気がついてほしいなと思います。それが最終的には広島の人たちの愛着によって支えられて、シビックプライドと言いますか、ここに来ればこんな建築があることを伝えていく。でも、それは田中さんの例のように、お母さん、叔母さんも「どこが有名なの？ふだんから使っていたわよ。」と言ったのは素敵な建築のあり方ですし、それから建築への関心が高まることによって、どんなに有名な建築家がつくったものでもだめなものはだめだと、市民の中から出てこないと街はよくならないと思います。逆にどんなに無名で小さくても、優れた建築には素敵だと評価されるべきだし。それは優劣をつけることではなく、身の回りの環境にみんなが注意を向けて、これは大事にしようとか、これは残そうとか、そんな思いが出てくることが最終目標しゃないかな。」

田中さん　「たしかに！」

男性１　「田中さんには、ぜひ写真を撮られるときにその歴史や背景も一緒に収めていただけたら、もっと楽しみが深まっていくかと思っています。益々の活躍を期待しています。」

田中さん　「ありがとうございます。」

男性１　「それから、青山一丁目の交差点にホンダのビルがありますが、あれはガラスが直接落ちないような構造になっています。そういうのがこれからの日本には必要で、壁面がガラス張りの事例も今日はありましたが、本当は地震国の日本ですから落ちてこないことを基本とするといったことが、ひとつのガイドラインになっていくのかなと思っています。」

田中さん　「知らないことを教えていただき、ありがとうございます。」

大森さん　「ホンダ青山ビルは、１９８０年代に椎名雅夫さんが設計されていて、やはりバルコニーのつくり方を先見的にやっていらっしゃいます。一方でガラスが安全か危険かという議論は、最新の技術だとガラスは落ちないというものもあるんです。」

田中さん　「ちなみに「インスタ映え」という言葉はあまり出したくなかったのですが、台本の企画にあって、おふたりの本質的な活動は、何か映えるという視点では活動されていないので、（期待と違ったことは）お二人にかわってお伝えしたいです。」

女性１　「広島に行ったことがなくて、建築も詳しくないんですけど、「空間」は好きで、広島の建築にも意味や意図があることを知れて、行きたくなりました。」

女性２　「田中里奈さんが大好きで今回来ました。建築のことは本当にわからなかったのですが、私は教員をしていまして、今年の６月に広島へ修学旅行で子どもたちを連れていく予定です。今日のことが予想外に勉強になったので、大変有難かったと思います。平和記念公園と原爆ドーム、そしておりづるタワーも行くのですが、景観を損ねないようにとか、記念公園から原爆ドームへの見方が続いているとかも、歴史と一緒に子どもたちへ教えられるから、子どもたちもそこに行くと「こんな感じなんだ。意味があるんだ」ということがわかると思うから、伝えたいと思いました。」

男性２　「私は尾道市の出身で、３年ぐらい帰っていませんが、広島のイベントがあるということで参りました。建物が好きで、今日は話がありませんでしたが、宮島がやっぱりすばらしくて、海に浮かんでいるわけですから。日本を代表する世界でも数少ない建物だと思いますので、ぜひ広島に行く機会をあれば見てほしいなと思いました。」

松隈さん　「宮島の鳥居と社の関係を、丹下健三はピースセンターをつくるときの慰霊碑と原爆ドームの一直線をつくるときに参考にしたと言われる先生もいます。やっぱり繋がっていると思います。」

大森さん　「さあ、そんなところで時間も満了になりましたので、ここで「女性を惹きつける建築」のトークイベントを終了したいと思います。」

３人　「ありがとうございました。」

トークを終えて，皆さんと記念撮影！